



《KNOCK》2017年 和紙、アートグルー、岩絵具、墨、箔、パネル h.276×w.242.3cm

山本直彰の近作絵画

山本直彰は1990年以来（渡欧による中断をはさむ）和光大学芸術学科で日本画研究を担当している画家である。2009年度には芸術選奨文部科学大臣賞を受賞、名実ともに新世代の日本画を代表する作家となった。92—93年のブラハ滞在以降、「扉」を象徴的に扱い、或いは支持体としているが、継続的に画題として採用してきたのはイカロス、ピエタ、即ち神話または基督教の主題であり、それらの物語



《ASK, SEEK, KNOCK, DOOR》2017年 和紙、アートグルー、岩絵具、墨、箔、パネル h.199.1×w.487.9cm

を通じて画中に投影されるのは人間的感情、就中悲哀と絶望である。

その画題から、あきらかな人物の気配、そして物語性が捨象されてきたのは10年代からだ。11年の個展（コバヤシ画廊、東京）出品作からは、暗示的ではあるが風景と思しき要素が現れるようになる。主人公と明示的な物語性が消え去り、替わって主要な位置を占めるようになったのは、従来支持体の位置を占めていた扉、或いはそれに相当する意味を持つと思われる門柱のような一對の矩形の形状、此方と彼方を分け隔てる結界である。

15年個展（コバヤシ画廊、東京）で発表された合成紙を支持体とする実験的作品《帰還XXI》、《帰還XXII》（2014）、17年に発表された大作《ASK, SEEK, KNOCK, DOOR》ではそれら形状の配置によって明瞭なシンメトリーを呈している。

シンメトリーは、近代以前の伝統を汲む日本絵画では、本質的に、巧みに忌避しようとされてきた要素だ。但し、それを免れたのが宗教空間においてである。来迎図、各種曼荼羅の例に典型的に見えるように、宗教空間に於いては寧ろ求心性が希求され、故に左右対称の構図が採用される。絵画は堂宇に佇む人にとって、或いは逝く人にとっての道具立て、装置である。

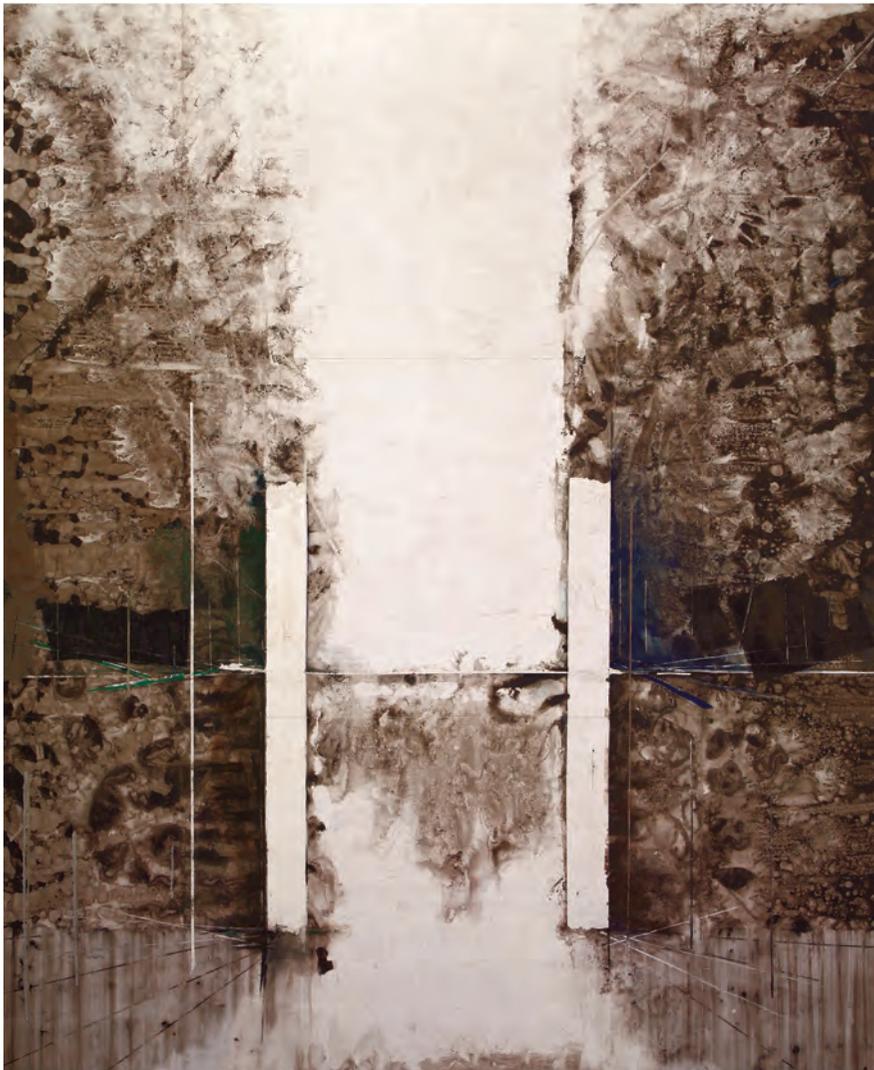
山本直彰の絵画のシンメトリーの中心に見られるようになった空虚（《帰還XXII》）な空白、据えられた扉が示すものは、絵画が物語それ自体であることを罷め、絵画が感情の表象であることを脱し、感情を喚起するための装置としての絵画たらんとしようとしている様子のものである。（芸術学科・半田滋男）

やまもと なおあき：1950年神奈川県に生まれる。愛知県立芸術大学で院展のゲテモノと言われた異端の片岡球子、表現的な作風の大森運夫に学んだ。新制作展で活動を開始するが、初期の出品作では表現的な人物像、人間の内省的側面に対する思索を絵画化している。のちに画家の諏訪直樹、中上清、評論家北澤憲昭らと知り合うことになり、彼らによる近代日本美術研究会「読画会」に参加、日本画を史的に考察、客観視するようになった。

90年より和光大学芸術学科非常勤講師。92年には文化庁芸術家在外派遣研修員としてブラハに滞在、以後扉を支持体として描く「Door」を発表、旧来の日本画の呪縛から逃れるようになる。神話絵画や宗教芸術の持つ絶対的な迫力を援用し、更に登場人物の抽象度を増した「IKAROS」「PIETA」に展開している。90年代には一連の日本画ブームがあり、伝統的な日本画とは一線を画す傾向が注目を浴びるが、中上、岡村桂三郎らとともにその代表的な画家に数えられる。2010年芸術選奨文部科学大臣賞受賞。



《帰還 XXI》 2014年 合成紙、アートグルー、岩絵具、箔、パネル h.181.8×w.448cm



《帰還 XXII》 2014年 和紙、アートグルー、岩絵具、箔、パネル h.276×w.227.3cm